

見たい聞きたい行きたいレポート
ユニバーサル ミュージック
マスタリングスタジオ訪問

照井 和彦 JAS 事務局長

音楽の高音質の呼称「ハイレゾ」も一般的になってきており、ファイルダウンロードに加え、ストリーミングサービスにまで拡がりをみせてきました。そこで今回からハイレゾファイルの生まれ故郷でもある音楽スタジオに、マスタリング作業を行っているエンジニアを訪ねて、マスタリングやハイレゾの最前線事情を伺うことにしました。

ユニバーサル ミュージック

ユニバーサル ミュージックは 1927 年設立の株式会社日本ポリドール蓄音器商會がポリドール・レコードの販売権を取得したことに始まり、その後幾多の変遷を経て 1990 年ポリグラムの日本事業統括法人としてポリグラム株式会社が設立されます。これが現在のユニバーサルミュージックの母体となり、途中 EMI ミュージック・ジャパンも傘下に収め今日に至ります。2018 年に赤坂から原宿の神宮前タワービルディングへ移転し、スタジオ設備も一新されました。

この商業複合ビルにはスタジオ設備が 7 部屋新設されていますが、この中の二つのマスタリングルームを今回取材させていただきました。それぞれの音響機材やエンジニアの考え方などをお聞きしましたのでレポートします。

エンジニア 吉野 謙志さん

普段の作業でも多くのハイレゾ作品ファイルをマスタリングしている吉野 謙志さんが作業する部屋です。吉野さんは東芝 EMI→テイチク杉並スタジオ→ポリグラムスタジオとレコーディング現場で経験を積みますが、2002 年に社屋移転・録音スタジオ閉鎖に伴い一旦フリーランスとなります。2007 年にマスタリングエンジニアとしてユニバーサル ミュージックに復帰しました。

手探りだったハイレゾへの取り組み

LP レコード制作に関わる録音の経験はありませんが、CD 全盛の時代に入りましたので、2ch アナログテレコによる録音からデジタルマルチトラック録音、現在



の HDD 録音まで全て経験してきました。ハイレゾ作品はこれまでとは音のニュアンスが違うため、最初は音作りに試行錯誤の繰り返しでした。

70年代80年代のアナログ録音の作品もハイレゾ化に人気がありますが、割とテープに残された情報量が少ないことがあって、現在のデジタル機材で録音制作された新譜の方が忠実に情報量も多く、ハイレゾとしてより醍醐味が味わえると思います。マスタリングに使用する機材もまたしかりで、技術は日進月歩ですので、アナログにしてもデジタルにしても新しい機器であるほどハイレゾ制作に適していると感じます。

ハイレゾから CD-DA 制作まで

ハイレゾ化にはサンプリングレートの設定もケースバイケースなのですが、音楽ジャンルにも向き不向きがあり、ロックや R&B といった音楽ジャンルの場合、音の太さや良い意味での粗さを求めて 48kHz サンプリングに戻ることもしばしばあるそうです。

また、一般的に「音楽ジャンルとしてジャズやクラシックといったアコースティック楽器による演奏では 96kHz/24bit 以上での作品化が向いている」といい、「デジタル音声信号の bit 長に関しても 24bit は余裕を感じるが、これを体感すると 16bit は詰まったように感じる」とのことでした。

吉野さんの作品

「ハイレゾ環境での録音が多くなってきている昨今では、それに伴って CD の音も良くなってきているのではないかと感じます。CD パッケージにするには 16bit/44.1kHz のフォーマットに必ずなりますが、元々 44.1/48kHz 辺りで録音されている作品よりも、88.2/96kHz 以上で録音された作品の方がハイレゾのテイストが残っていると感じます」



こうおっしゃる吉野さんにオーディオファイルに向けた作品として「テレサ・テン ベスト・ヒット」2018年リリース SA-CD ハイブリッドレイヤーディスクを紹介してもらいました。このアルバムはオリジナルのアナログテープから DSD マスタリングを施した作品で、従来の PCM での CD 作品とはまた違うニュアンスを出せたものになっているそうです。ちょっと気になる一枚ですね。

「レコード会社のマスタリングルームなので、私が関わっている作品はジャンル・時代問わず、新譜・カタログ（旧譜）含めて膨大ですが、フロントラインではバンド、ソロアーティスト、R&B、アイドル、アニメ・声優、劇伴、歌謡曲、演歌、ジャズと多岐に携わっています。今は一昔前から考えるとハイスペックな機材が宅録レベルでも使用可能な時代ですので、確実に音質的なクオリティは上がっていると思います」

エンジニア 松村 学さん

高校生の頃に池袋で開催されたオーディオ・フェアがとても楽しかったと回想してくれた松村 学さんは、ラジカセを二台使ったのピンポン録音や4トラックのMTRを手に入れて、楽器演奏できる仲間たちとダンスミュージックを創るなどしていましたが、やがてコンプレッサーやリミッターまで揃えて本格的な音楽制作にのめり込んで行ったといいます。「今でも、DAW関連やシーケンサーソフトが発売されると気になって手がでちゃいますね」とのこと。



そんな松村さんは都内の音響関連専門学校を卒業後、ソニー・ミュージックでアーカイブ業務からキャリアをスタートさせ、一旦外部アシスタントなどを経験し、2005年にユニバーサルミュージックへ移籍しました。

松村さんの作品

これまで携わってきた作品は洋楽・邦楽と音楽ジャンルも問わず、新譜やカタログ商品のハイレゾ化なども行ってきたといいます。取材日はザビア・クガートのアルバムの編集画面を実際に見せていただきました。



「ユニバーサルミュージックでは、古い制作のカタログ商品であっても現代の音に作り込まず、マスターテープの素晴らしさをそのままお届けしたいというコンセプトの作品が多くあります。オリジナルのアナログテープが存在しているならば、その状態を確認し、最高の音で再生させるように努力して、それをそのままDAWに取り込みます。エンジニアの主観は極力無くすのですが、ノイズリダクションボードの使い方、テレコの選定やアジマスの調整など、アナログ領域の作業には気を使います」

このほかリーダーテープのつなぎ目に起因するノイズ除去の様子なども実演してもらいました。



今回お二人のマスタリングエンジニアの作業ルームにお邪魔して、お話を伺うとともに、作業で使っている機材についても詳しくご説明いただきました。これら機材関連の紹介はまた別の機会を設けて読者の皆さまにお伝えできればと考えております。ご期待ください。